

第10期宇治市生涯学習審議会 会議録

名称	第10期宇治市生涯学習審議会 第7回審議会						
日時	令和4年7月15日(金)午後2時~4時						
場所	オンラインによる開催 (一部 生涯学習センター2階一般研修室にて開催)						
出席者	委員	○	内田 徹	○	佐藤 翔	○	西山 正一
		○	岸田 和男	×	畠 繁行	○	林 みその
		○	切明 友子	○	杉本 厚夫	○	向山 ひろ子
		○	桑原 千幸	○	長積 仁	○	森川 知史
		○	小宮山 恭子	○	中本 裕也		
	事務局・市教委職員	×	北尾 哲 (教育部長)				
		○	上道 貴志 (教育部副部長)				
		×	林口 泰之 (教育支援センター長)				
		○	金久 洋 (教育支援課長)				
		○	前田 紘子 (生涯学習課長(兼)生涯学習センター所長)				
		○	渡邊 聖介 (生涯学習課副課長(兼)生涯学習センター主幹(兼)生涯学習係長)				
		×	松田 輝子 (生涯学習課事業係長(兼)生涯学習センター主査)				
		○	島 千尋 (生涯学習課生涯学習係主任)				
	○	村井 あゆみ (生涯学習課生涯学習係嘱託職員)					
傍聴者	1名						

会議要旨は、下記のとおりである。

1. 委員選出について

「宇治市文化芸術推進委員会」が設置されることになり(文化スポーツ課が事務局)、令和3年度の「紫式部文学賞イベント実行委員会」の役割が継承されることになったため、小宮山委員を実行委員会の委員として推薦。→委員了承

§ 第6回審議会会議録について

一部修正することを確認し、ホームページで公開する。→委員了承

2. 報告事項

・令和4年度山城地方社会教育委員連絡協議会総会について

6月10日(金)宇治市生涯学習センターにて令和4年度山城地方社会教育委員連絡協議会総会が開催された。京都府教育庁指導部社会教育課協働コーディネーターの丸川修氏より「地域交響プロジェクト(協働教育)について」の講演があった。講演後、各市

第10期宇治市生涯学習審議会 会議録

町の社会教育委員の取組発表をして交流を図り、宇治市からは杉本委員長に発表いただいた。当審議会からは杉本委員長、向山委員長職務代理、内田委員、岸田委員、切明委員、小宮山委員、西山委員、林委員が出席された。

(委員)

議長を任せられ大変貴重な経験となった。宇治市の取組発表は非常にわかりやすい内容でスムーズに受け取れた。

(委員)

最近オンライン会議が多い中、対面の会議は良いと、多くの参加者が話されていたのが印象的だった。研修内容の京都府地域交響プロジェクトの交付金は若年層の地域力アップにつながる交付金事業だと思った。小さな子どもの親世代の力を引き出して、次の世代へつなげるような事業を興しやすいつと感じた。また小さなグループでも交付金を受けやすいつと感じたので、新しい多様な課題に対応した事業がどんどんできていくと良い。

(委員)

予定されていた講師が体調不良で講演内容が変更となったため、各市町の社会教育委員の取組発表をして交流することになった。各市町の発表はとてもユニークで、対面で発表を聞くことができるととても良い機会になったと思う。

(委員)

ほとんどの市町で、事務局ではなく社会教育委員が取組交流の発表をしており、社会教育委員が自覚を持って活動されていることがわかりとても良かった。皆積極的に取り組んでおられ、生涯学習がどうあるべきかを考えていくのにとっても参考になった。会議だけでなく専門部会を持ったり、LINE グループをつくって情報交換や議論をしている市町もあり、時代とともに社会教育委員や社会教育委員会のあり方も変わってきていることを実感できた素晴らしい取組交流だった。

・令和4年度京都府社会教育委員連絡協議会総会について

6月24日(金)園部文化会館にて令和4年度京都府社会教育委員連絡協議会総会が開催され、滋賀大学の神部純一教授より「これからの社会教育委員への期待～行動する社会教育委員を目指そう～」と題して講演をいただいた。杉本委員長、向山委員長職務代理、岸田委員、小宮山委員、西山委員、林委員が出席され、森川委員は会長として出席された。

(委員)

新型コロナウイルス感染症の影響で集まらない期間があった分、人と人が同じ場所

で同じ話を聞くことができ嬉しかった。神部教授の講演は非常にわかりやすかった。社会教育委員がどういうものかという根本から現在に至り、生涯学習は何を目指していけば良いのかということをととてもわかりやすく話していただき勉強になった。「行動する社会教育委員イコール学ぶ人であり、実践する人であれ」という言葉が印象に残っている。

(委員)

以前は、生涯学習は趣味や教養の学びの目的という考え方が中心だったが、住民と住民がつながりを持てることが重要になったと思う。社会教育委員は、地域課題を反映し、諮問に対して意見を集約したうえで答申することが大切だと改めて感じた。行動する社会教育委員として、常に学ぶ、人に伝える、共感する、人々と輪をつくってつなぐ努力をする、地域住民に活動を知ってもらうことが必要である。地域において、自分自身も各種団体の中で何か実践して社会教育の活動をしたと思った。

市民を巻き込む方法についても教わり、良い勉強になった。

(委員)

神部教授の講演はどれも聞き逃したくないと思う内容だった。生涯学習は時代とともに変化してきていて、現在の生涯学習は社会や地域に目が向けられるようになった。地域住民の学びの場は仲間づくりに適していて、学びの場を通じた住民同士のつながりはとても大切である。

これからの社会教育委員にとって大切なことは、まず自分が学ぶ人であり、地域や組織に伝える大切さ、伝えることを意識して実践していくことである。議論したことは実際に地域で活かされることが大変重要である。「行動する社会教育委員から、行動する地域人へ。社会教育委員を卒業しても、生涯社会教育委員であれ。」という言葉が印象的だった。

・令和4年度やましろ未来っ子みんなでHUGフォーラムについて

6月26日(日)宇治田原総合文化センターにて令和4年度やましろ未来っ子みんなでHUGフォーラムが開催され、岸田委員が出席、森川委員が京都府山城社会教育委員連絡協議会会長として出席、講演された。

(委員)

予定されていた講師が体調を崩され、急遽森川委員が子どものウェルビーイングの講演をされた。「社会的親子」という言葉が印象に残った。すべての子どもたちの親であるという意識で子どもたちに関わることが、社会全体で子どもを育てていくことにつながると感じた。また、子どものウェルビーイングを高めるためには、親や教師や社会のウェルビーイングなど、色々な立場のウェルビーイングを高めることが必要なのではないかという話も印象に残った。

今後の宇治市の生涯学習の未来予想図について議論するのに役立つような内容だった。

(委員)

予定されていた講師が体調を崩され、急遽講演を引き受けた。講演はもともとの講師が設定していたテーマで行った。子どものウェルビーイングを話すにあたり、色々な立場のウェルビーイングも話すことが必要となり、自分自身、以前よりもウェルビーイングの理解が深まったと感じた。また、対面で開催できる喜びを様々なところで実感している。

・宇治市生涯学習人材バンクについて

宇治市生涯学習人材バンクには、令和4年4月現在で個人59件・団体12件合計71件の、豊富な知識や技術、経験を持つ講師が登録されている。

毎年、登録講師向けアンケートと依頼者向け利用報告書により利用率を調査している。その結果、令和3年度の利用率は19.7%だった。全体利用率として今年度より、一人の講師が2回以上の依頼を受けている場合等の延べ利用回数ベースでの利用率も算出することとし、こちらは22.5%となっている。一昨年の令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で利用率が急激に落ち込んだが、令和3年度は利用率を見ると回復傾向に見える。しかし登録講師数の延べ利用数が16件であることをみると、まだまだ回復傾向にあるとは言いにくい状況である。引き続き広報手段の工夫や、例年開催している講師交流会の開催など、人材バンクの認知度を高める取組をしていきたいと考えている。

(委員)

登録件数が減っているのは、新型コロナウイルス感染症の影響か？

(事務局)

新型コロナウイルス感染症の影響もあると思うが、ここ数年間登録講師の削除依頼があったものの整理できていない部分があり、今回整理したことも影響している。

(委員)

講師の年齢別の分類はしているのか。

(事務局)

講師に対するアンケートは、年齢を記入する項目は設けておらず、分類していない。

(委員)

若い方にも講師登録をしてほしい。

(委員)

私も人材バンクに登録しており、今までは年間約50件の講演依頼のうち、2、3件は宇治市からであったが、この2、3年は講演依頼がほとんど無い状況だった。どれくらいの方が人材バンクの情報を見ているのか。人材バンクの広報部分にもう少し力を入れる必要があると思う。

(事務局)

人材バンクの広報について展開をしていかなければいけない。ご意見をいただくと有難い。新型コロナウイルス感染症の状況を見ながら、人材バンクがもっと活用されるように進めていきたい。

(委員)

私も人材バンクに登録しており、過去に年間10件超の利用があったが、今は1、2件程度である。福祉や民生など色々な団体があるので、そちらの方にも広報をすれば、人材バンクを利用する方が多くなると思う。学校関係は、宇治学を通して学校から連絡があるのでうまくいっていると思う。

(委員長)

一覧表には講師の個人情報（電話番号、メールアドレスなど）が載っているが、取り扱いは問題ないか。

(事務局)

ホームページと冊子で公表している情報については、登録講師の方に公表可否を確認したうえで掲載している。希望によりメールアドレスだけ公表している方もおられる。

(委員長)

個人情報の取り扱いについては、慎重にお願いしたい。

3. 協事項議

「宇治市における生涯学習の未来予想」

(委員長)

今回の審議会では、第6回審議会の赤尾教授の講演をふまえて、「宇治市における生涯学習の未来予想図」と題して、気づき・疑問点等をお話いただき、議論を深めていきたい。

(委員)

赤尾教授の講演と、京都府社会教育委員連絡協議会総会の神部教授の講演とでつながる部分があり、決められた審議会の中で諮問・答申をするだけでなく、「活動する社会

教育委員」というのが、大きなテーマだと思う。「活動する社会教育委員」とはいったい何をするのかというのが大事であり、今後の議論の中心になると思った。

(委員)

大学のときに生涯学習を学んでいたが、約30年で生涯学習がどう変わったのか復習する意味も含めて、赤尾教授の講演を聞かせてもらった。生涯学習の位置付けが変わってきたことと、社会が非常に変化してきていることを感じた。

「上から目線にならないように」という話が、生涯学習審議会委員として関わる期間が長くなってきているため、すごく響いた。どういう立場から意見をするのが良いのか、上から目線になっていないか、自分を振り返ることを考えた。

「誰ひとり取り残さない生涯学習」という部分では、多数意見は聞こえてくるが、少数意見にどう耳を傾けたら良いか、特に生涯学習に関心のある人の意見は聞こえるが、関心が無かったり、そもそも知らなかったりする人の意見はどうやって聞けば良いのか、課題を感じたのが一番の感想である。

(委員)

社会教育士の資格を取得することにより、生涯学習を伝えていけるなら、資格を取ることについて何か助けや、補助があるといいなと思った。

「学ぶ喜び、伝える楽しさ」が一つのキーワードになっていくのではないかと思った。京都府社会教育委員連絡協議会総会の神部先生の講演からも、伝えることによって楽しさや幸福感が増すのではないかと思った。すべての人がそのような立場になれるよう、何かできることはないかと改めて思った内容であった。

(委員)

「市民力とのつながり」という言葉がたくさん出てきた。お互い様という考えを持ち、個人が辿る生涯の道筋と学校教育と社会教育とを融合させ、未来像は総合的な行政も参加する形だったと思う。新しい公共性をつくっていくことについては、行政任せではなく、市民と企業やNPO法人の仕組づくりは我々が話している仕掛けづくりと同じではないかと感じた。どのような理念で生涯学習を進めていくかについては、宇治市に問いかけるだけでなく、我々社会教育委員としても課題があるはずなので、私たちにできることはないだろうかということも考えることも必要で、今期のテーマとして考えていくことはとても良いと思った。青少年から高齢者までの生涯学習については、能力、行動力を持って誰もがやれることからやっていかなければならないと思った。ノーマライゼーション社会、健常者と障害者が同じ社会活動ができる仕組づくりが、将来の社会教育の一端ではないかという話があり、これまで議論してこなかった分野だが、考えていかななくてはいけないと感じた。

(委員)

大阪では、人権に基づく生涯学習支援に力を入れてられるということで、社会的に不利益を被る人たちの学習支援を優先的に行っていく中で、支援者からの一方通行になりがちなところを、「支援者と学習者の双方のベクトル」というキーワードが印象に残り、つながりの大切さや学びの循環に気付かされた。

宇治市の高齢者等に対するICTの取組として、スマートフォンのアプリを利用して市政だよりを音声で聞くことができるようにしていると聞いた。このような取組がICTを学ぶことがきっかけになり、スマートフォンを活用して身近な情報を得る機会が増えるといいと思う。

まずは小さなことからやっていくことが重要だということをおっしゃっていただいた。

(委員長)

宇治市のICTの取組についてご紹介いただけると有難い。

(事務局)

宇治市のホームページで、市政だよりなどのPDFデータを読み上げるシステムが最近導入された。多言語にも対応している。内容は市政だよりなどの広報誌で、防災情報、ゴミの出し方などが中心になっている。担当課は秘書広報課であり、今後内容の対象を拡大していく予定であると広報されている。

他には、携帯電話会社と連携して、スマートフォンの使い方を学ぶ講座を実施している。対象は、最近スマートフォンを利用し始めたり、これからスマートフォンに変えようと考えているシニアの方で、生涯学習センター、公民館、図書館等で開催している。

他には、生涯学習センターの事業として、オンライン会議システムのZoomの使い方を学ぶ講座を実施している。令和5年の年明けには、オンライン会議のホストをする(主催する)という一歩進んだ講座も予定している。

(委員長)

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、社会全体でICT化が求められ、対応が急務となっている。ノーマライゼーションなどを考えていくうえで、対応していく必要がある一つの例を示していただいた。

(委員)

長い間、生涯学習とは自己実現だと思ってきたが、生涯学習審議会委員になり、自己実現から社会還元につなげていくことを学んでいる。赤尾教授の講演では、「誰ひとり取り残さない生涯学習」という考え方や、社会的に立場の弱い人、不利益を被っている人の学習支援を優先的に考えるという教えが、一番精鋭的な言葉だった。宇治市はそれらについて取り組んでいかなければならないと思った。コミュニティ・スクールのコーディネーターとして小学校に行く機会が多いが、教室に入れなかった子どもたちがクラスに1、

第10期宇治市生涯学習審議会 会議録

2名おり、特別支援が必要と思われる児童は、グレーゾーンを含めると3分の1程度いると聞いている。学校または子どもを起点として、取り巻く地域や私たちが支援していく仕組づくりができないかと思っている。今回色々な話を聞き、やるべきことが少し見えてきた気がしている。

(委員長)

「自己実現から社会還元」が今期の生涯学習審議会のキーワードだと思う。HUGフォーラムの報告の中でウェルビーイングの話があったが、OECDにおいても、個人のウェルビーイングが社会のウェルビーイングにどうつながっていくのかということがテーマになっていると思う。我々は、本当のウェルビーイングとはなんだろうということを考えなければいけない。

また、それぞれの子どもに合った教育が必要であり、画一的な教育は影をひそめてきているように思う。そのような観点からもコミュニティ・スクールは大きな力になっていくであろうし、子どもをどう支えていくか、育てていくかというところから関係ができてくるので、生涯学習というのは教育と離して考えることができない。

赤尾教授の講演では、「ライフコース」という言葉がすごく印象に残っている。今までは生涯学習を考える際に、「ライフステージ」という時間軸で捉えていたものを、様々な生き方、それぞれの幸せのあり方、様々なウェルビーイングがあるんだという個々の「ライフコース」という言葉で捉える必要がある。生涯学習とは、生まれてから死ぬまでの生涯にわたって勉強していくことだと思っていたが、赤尾教授は「個々の持つ多様な生き方を考えていく」という視点で生涯学習を考えておられたのがとても印象的だった。

(委員)

生涯学習審議会委員だけでなく、青少年健全育成協議会委員もやっている中で、コミュニティ・スクールも同様だが、他の分野でも同じところを目指しているように感じている。

子どもたち、地域住民、学校の先生、保護者等が交わっていくことを目指す中で、社会教育委員でなくなったとしても、皆さんとともに地域住民と一緒にあって、長く続けていける関係を築き、活動していかななくてはならないと思った。

(委員)

赤尾教授の講演でも言われたように、新たな課題に取り組むには、新たなニーズを知らなければならない。そのためには地域住民のニーズを知ることが大事だと言っておられ、多様な問題に取り組むためにニーズを知りたいと思った。

また、生きにくさや働きにくさを抱えている人を支援する中でも、多様な地域の課題が関係していると思った。課題を解決するために、社会教育委員の地道な活動が大切だとも思った。ニーズを把握しながら地道な活動が続けていくということが必要であるということを特に感じた。

(委員)

赤尾教授の講演では、「ライフステージ」という画一的な人生の段階という考え方から、様々な「ライフコース」というそれぞれの人が生きる道があって、必ずしも一方向に進むだけではなく、行きつ戻りつがあるという考え方を学んだ。またそれをどう支援していくのかという話は大変勉強になった。

講演の中であったように、宇治市としてどのような理念のもとで生涯学習支援を行うのかを明確化する必要があると思う。どんな理念かについては、宇治市として何に力を入れていくのか、なぜそこに力を入れるのかというところは大切である。市民のニーズはどこにあるのかを把握する方法から考え直す必要があり、なかなか作りづらいと感じるところはあった。

どういう理念で宇治市の生涯学習をやっていくのかはこうして皆で議論していくことで一緒に形づくっていくものなのかと思う。その結果、次の振興計画等に活かしていけるような体制がつけられていくのかと考えていた。

(委員)

第6回の審議会には出席できなかったため、資料を読み、これまでの皆さんの意見を聞いて発言させていただく。

資料は理想的なことが書かれていて、生涯学習を実際にどう進めていくのか、わかりにくいところがあった。また、世代間の考え方の差をどう埋めていくのかは大切だと思うが、経験が豊富な世代が若年層に還元していこうとすると、受け取る側である若年層のニーズにずれは出てくると思う。受け取る側がどの程度必要に思っているものなのか、また提供側にとっては当たり前な内容であれば、受け取る側のニーズに気付かないといったことなどに対して、社会に還元しようとする提供側は注意しなければならないと思う。こうしたところに対する検討が必要だと思う。

また、いくつもフィールドがあるが、一定の同じ人が色々な場所で活躍しているに留まっているのではないかと思う。積極的な人が固定化されている中で、新しい人材を掘り起こしていくことが重要になっていくのではないか。

(委員長)

人材の確保や、理論と実践の繋がりは今から生涯学習支援を進めていく上で非常に重要である。ジェネレーションギャップについて、多様性の観点でどう捉えていくのが大切である。

(委員)

色々な委員会等で、同じ人が委員を務めていることが多いと思うが、なかなか新しい人材を見つけにくいというのは心苦しい。

(委員長)

昔は、社会教育委員は名誉職ということで、委員の選出は充て職で行っていたが、社会教育法が改正され、充て職をやめた経過がある。現在、宇治市は各分野から選出され、男女比の面でも上手く人材確保されているように思うが、今後どのように新しい委員を選出するかは重要になってくる。

(委員)

生涯学習とは少し離れるが、先日の参議院選挙ではSNSの情報が強く影響したと感じた。現在はネット社会であり、インターネットの情報は、時に一定の市民に強く働きかけることがあるので、生涯学習を考える際に、今後はそういったことも考えておかなければいけないと思った。

(委員長)

昔からフェイクニュースや情報リテラシーの問題があるが、これまでは考える機会が多くなかったと思う。ネット社会が進んだ今、新型コロナウイルス感染症のワクチンの情報等、さまざまな情報を目にする機会が多くなり、メディアが真実を伝えているのかという疑問の声が増え、真実を見極める力が、これまで以上に必要になっている。

1990年代にカナダが国語の授業を使って、メディアリテラシーという授業を始めた際、日本の学校教育でも取り入れる動きがあり、総合的学習の時間をつくったが、日本ではなかなか進まなかった。本来は重要な分野だがやってこなかったため、生涯学習の中でメディアリテラシーの問題も含めて考えていかなければならないと思う。

(委員)

年齢層により、情報の収集の仕方が変わってきていることを感じている。年齢が若くなればなるほど、例えば家庭を持つ人が多い30代40代の子育て世代は、変わってきていると思う。生涯学習の人材育成にも関わってくるが、次の世代を探したり育てたりするときに、今までと同じアプローチではごく限られた人しか届かないのだろうという気がする。市の広報を読む人も限られているだろうし、必要な情報以外をインターネットで探してくる人も少ないだろうし、次の世代に生涯学習に興味や関心を持ってもらうためには、アプローチを変えていく必要があると思った。

人材バンクの広報にも関わってくるが、今のままでは発信者の思いが伝わる層が減っていくばかりで、大多数には伝わらなくなってきているのではないかと感じた。

(委員長)

これまで、生涯学習は、退職後の過ごし方や社会貢献の方法を学ぶことを目的として、勤めることで社会貢献をしてきたリタイアした人たちをターゲットにしてきたが、若い世代にアプローチしてこなかったのが落とし穴になっている。若い世代に向けて役立つ生涯学習をどう提供していけばいいのか課題である。

(委員)

社会教育や生涯学習というものを知らない人も、こちらが伝えれば、どのようなものかをなんとなく分かってくれる。周りにはそのようにして協力してくれる人が多い。

先ほど学校のクラスに何人かは支援が必要な子どもがいるという話があったが、学校は丁寧に一人ひとりに合った対応をしていると感心した。

自分たちがどのように社会教育や生涯学習を伝えていこうと考えたとき、言葉だけで伝えるのではなく、例えば、祭りなどの地域活動を通して、次の世代、また次の世代へとつなげられるのではないかと考えている。

(委員)

生涯学習を考えていくうえで、30代40代は子育てで忙しい人が多いと思うが、子どもの力を借りてみてはどうかと思った。子どもを対象としたイベントには子育て世代の親と一緒に参加することが多いので、隠れた人材も発掘ができるのではないかと考えた。

例えば、以前は農業をしていたけれども現在は高齢になって農業から離れている人に、声をかけたら力を貸してもらえないのではないか。農業をやっていない方も休耕田を借りて、栽培から収穫まで、高齢者、子育て世代、子どもたちの交流が一同にできたらいいと思う。農作物を育てたり、販売をすることで、異なる世代が同じ気持ちを持てればいいのではないかと考えた。

(委員長)

人材という視点で考えてみると、子どもたちの力を借りることは良いことだと思う。

南山城村の地域学校共同本部の運営委員会では、児童2人に委員の委嘱をした。全国でも珍しいことである。生涯学習審議会に児童が入っているイメージをしてもらうとわかりやすいと思う。その子どもたちと一緒に、こんな学校だったら楽しいなという議論をしたが、子どもたちはとてもよく考えていて、大人たちの思いつかないようなことも、子どもたちからはどんどん意見が出て、とても面白かった。子どもたちの言葉は大人の経験をブレイクスルーするうえで、とても大事なものであった。

「子ども」という概念は、昔はなかったが、学校に通う人間を子どもとして、家族と学校によってつくられたものであるという研究がある。現在、子どもから学ぶ、子どもと一緒に学ぶという姿勢が欠けていると思う。子どもを一人の人間として接していくことが重要になってくるのではないかと考えた。

ライフコースの多様性を考えるうえで、子どもも大人と同様の人格として捉えていく必要があり、子どもの力を借りて、子どもと一緒に学んでいく、そういう生涯学習のあり方が必要になってくる。南山城村のような動きが宇治市の生涯学習審議会でもできればいいと思う。

(委員)

昔は意見を言った者を排除したり、年配者の意見が強制的に採用されるといった時代

があった。現在も地域によっては意見が合う者のみの集まりになりがちな場合があり、そうすると地域社会が極端な方向に行きかけたときに制止する者が必要になる。委員構成や団体構成は、色々な意見の人が入っているとまとめるのは大変だが、良いと思うのでこれからが楽しみである。

(委員)

各委員の話を聞いて、宇治市はどんなところを大切にしていきたいのか、我々はどういうまちづくりをしたいのか、そのためにどういうことを仕掛けなければならないのかを表現していくことが重要であると感じた。これから何を目指していくのか、どんなことを大切に守っていくのかを表現していくことが必要である。宇治市をどうやってプロデュースしていくのか、宇治市の大切な文化をどう発展させていくのか、これらのことを生涯学習で関わっていく中で表現していくことで、多くの共感や賛同を得られるのではないかと感じた。

(委員長)

理念に関して、不易流行、つまり、宇治市では何を大切に守り、何を新しくしていかなければならないかを考えていく必要がある。

赤尾教授の講演で、「ニーズ」という言葉が何度か出てきた。現代社会におけるニーズに対応していくこととあわせて、我々がまだ気づいていない未来に向かってのニーズを定義し、考えていくことが必要だと思う。

現存する職業のうち49%が、2030年までにAIに取って代わられると予測されており、ヨーロッパではリカレント教育が生涯学習の中に位置付けられている。これを踏まえると、現在必要とされている職業つまりニーズが、将来的になくなることが予想できるため、リカレント教育を進めていく必要がある、生涯学習がどう対応していくかを考える必要がある。生涯学習がリカレント教育を行うのではなく、どのようなリカレント教育が必要かを生涯学習の観点から議論していく必要がある。

例えば、一昔前は「手に職をつける」つまり「専門性を持つ」ことが重要とされていたが、チームワーク型の雇用が求められた背景から、「学歴をつける」つまり「ジェネラリストである」ことが重要とされるように変化した。将来的には、ヨーロッパ型の「ジョブ型雇用」つまり「専門性のある個人事業主と契約する」形態に変化すると予想されており、一部の企業ではすでにこの雇用が始められている。すなわち、将来的に、個人が自らの専門性をとらえることが必要となり、リカレント教育が求められていくという観点で、現在の30代40代が生涯学習のターゲットとなり得るのではないかと。

現在、転職のCMが増えていて、終身雇用でなく転職が当たり前になりつつある。イギリスでは大学がリカレント教育の機関となっており、同じ仕事に再就職するにも、いったん仕事を辞めて、大学で専門性を高め、資格を取得し、社会に戻るのが基本になっている。今後、日本の大学もそのように変化していく可能性があり、それが未来に向かってのニーズであり、我々が取り組むべき生涯学習のあり方の一例ではないかと思う。

4. その他

- ・令和4年度近畿地区社会研究大会（奈良大会）について

9月2日（金）に令和4年度近畿地区社会研究大会（奈良大会）が開催される。参加されると回答いただいている委員の方で公用車利用の委員は、当日、宇治市役所議会棟前からバスで出発する予定をしている。

次回開催について

（事務局）

次回審議会については、後日日程調整をさせていただきます。

- ・最後に

（委員長職務代理）

素晴らしい意見交換ができた。今後も審議を重ねていいものができるようにしたいと思う。